

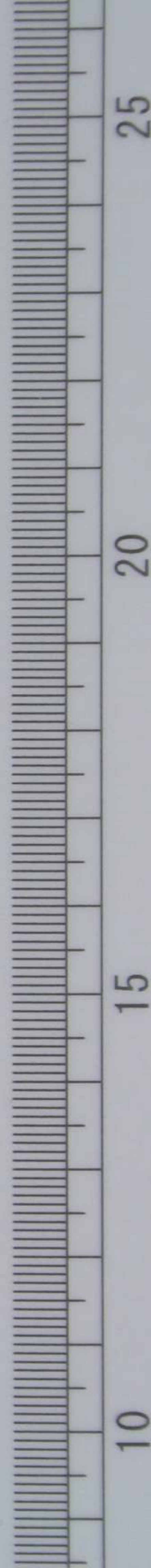
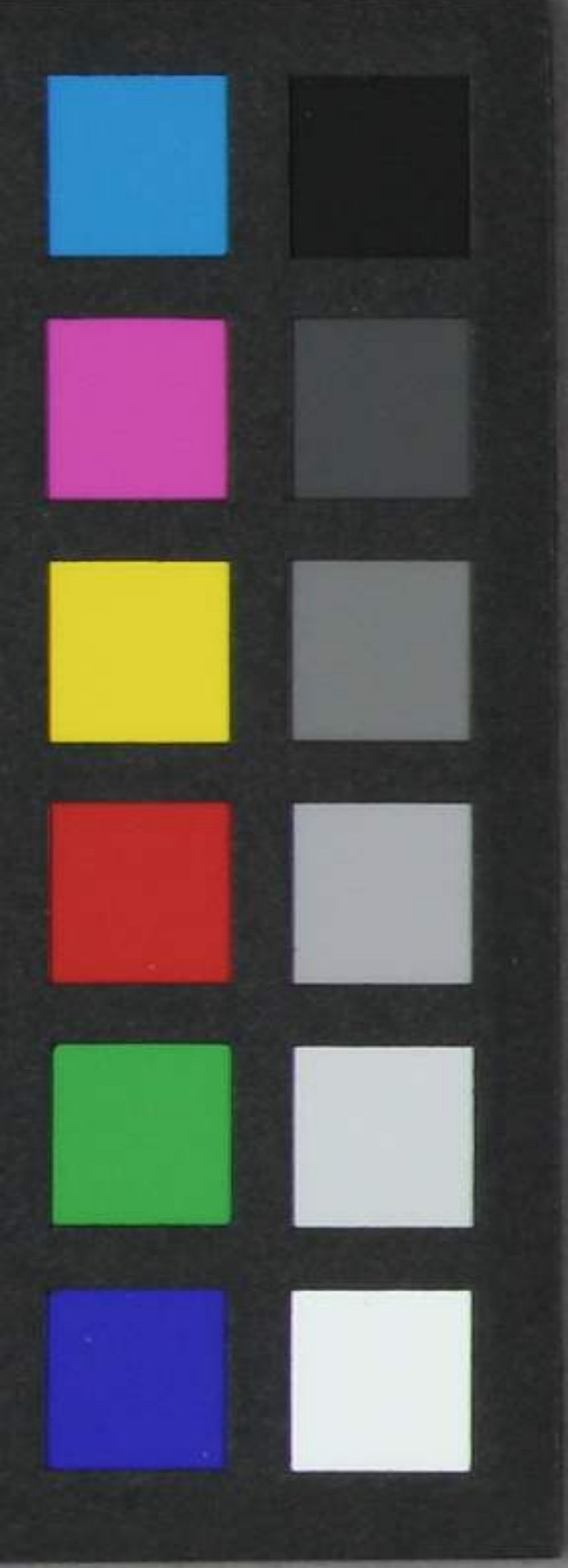
虹 つ 立 朝

謠 民 秋 白

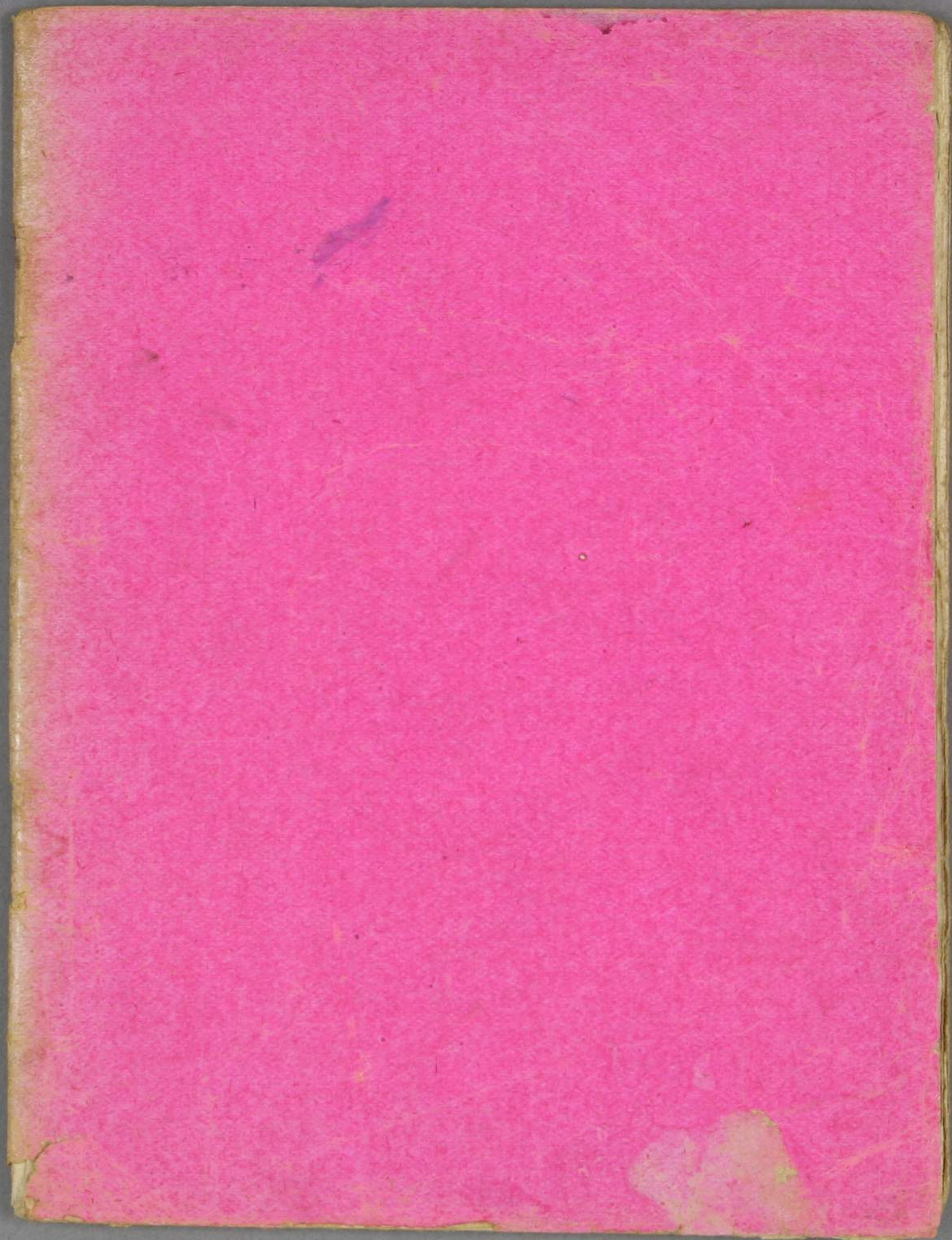
5



A R 5







白秋民謡の言葉

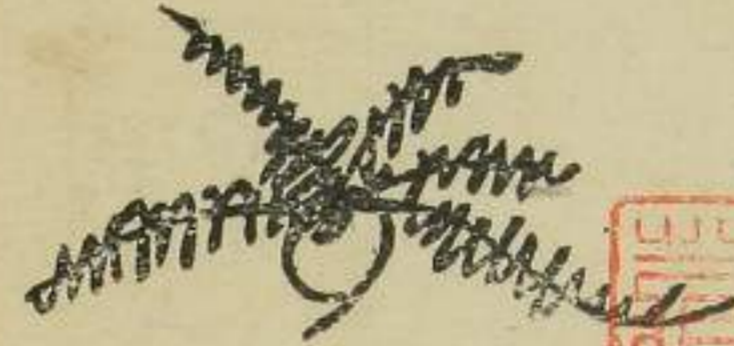
燕の二つ三つと、
鰯のひとつかみと、
たつたそれだけで代へてもらひたいのだ、
わたしのこの民謡と。
そして、歌つてもらひたいのだ。

朝
三
つ
虹

八丈風
片浦風

北原白秋著

ii



白秋民謠

5



序曲

島で紅いのは磯山つばき、
沖で風虹、大漁旗。
八丈大島名にこそ立てれ、
わたしや片浦、片たより。

白
秋

目次

椿日和

女護が島(四章) ……	三	千鳥 ……	三二
伊達のお腰(二章) ……	六	短夜 ……	三三
紅い椿 ……	八	後朝(三章) ……	三三
落つばき(四章) ……	一〇	片浦千鳥(二章) ……	三七
戀の流人か(三章) ……	三	遠い岬 ……	四〇
ぬしは牛飼(二章) ……	六	祭もどり ……	四二
お國衆なら(二章) ……	八	獅子網(五章) ……	四三
出舟(四章) ……	一〇	遠漁火 ……	四〇
沖の小島の(二章) ……	三	風虹 ……	五二
大島(四章) ……	五	たまの機嫌と ……	五四

風虹

椿日和

八丈風

附、大島風 四章

二十三章



鳴

1

女護が島じやよ、
殿ならおじやれ。
男後生樂、
手はとらぬ。

3

南風みなみかぜじゃぞ、

みな出でておじやれ、

迎むかへ草履くさりの

紅鼻緒べにばな。

穿はかば穿はかんせ、

ただ殿このまかせ、

紅あかい鼻緒ばなの

投なげ草履くさり。

沖おきの青ヶ島あおがしま、

殿御このごの島しまよ。

南風みなみそよそよ、

女護にょごが島しま。

伊達のお腰

1

伊達のお腰の
練玉の紐は、
誰も觸れねど
しやらくくと。

6

2

觸れちやくれまい、
練玉の紐に、
島の娘は
一重帯。

7

紅い椿

紅い椿を、
一寸、目で知らせ、
知らぬ顔して、
さて、しやらり。

紅い椿の

花かけ出れば
知らぬ顔して、
また、しやらり。

落つばき

1

紅あかいつばきよ、
髪かみ梳すきましよか、
ここは谷たにかけ、
かくれ井戸いど。

2

わしが髪かみ梳すきや
ぼんと首くびたたき、
紅あかい椿つばきよ、
誰たが逃にげた。

3

ほたと落おちたは

紅玉つばき、
誰もおじやらぬ、
島つばき。

4

誰も見もせぬ、
また來もせぬが、
紅いつばきが、
また落ちた。

戀の流人か

1

戀の流人か、
椿の井戸に、
光らしやんすぞ。
島雉子。

戀こひの流る人じんか、

釣つり棹さそかたげ、

光ひからしやんすぞ。

磯いそ燕はめ。

戀こひの流る人じんか、

茅屋かやの月つきに

光ひからしやんすぞ、

ほととぎす。

ぬしは牛飼

1

ぬしは牛飼、
笛吹き上手、
いつも横眼に
見て通る。

2

見やれ、水甕、
黄八丈の羽織、
わたしや、頭も
濡らしやせぬ。

お國衆なら

1

お國衆なら
持て來てたもれ、
戀のむだ花
わすれぐさ。

2

いかな、忘りよか、
お國の人は
泣きの涙を
置土産。

出舟

1

いよよ別れか、
ぼらばら松か、
ここは檜立、
早や泣ける。

2

八丈八重根の
瀬の瀬の岩よ、
汐の走りを
なぜ堰かぬ。

3

船の鏡

ふつりと切れりや、
縁が切れたと、
逃げる氣か。

4

八丈八重根の
後追ひ千鳥。
舟も出たじやに
なぜ死なぬ。

22

沖の小嶋の

1

沖の小嶋の
ちらちら雪は、
すぐにこぬかの
雨となる。

23

深くなりやこそ、
八丈の雪は、
すぐに別れの
雨となる。

大 嶋

髪は背の丈、
油は椿、ヨ、
かはいアソコは、サア、
島そだち。ヨ。

月の椿つばきの、

花はなかけゆけば、ヨ、

油あぶら搾しめ木の、サア、

音おとばかり。ヨ。

アアンンココ御お不ふ在ざいか、

また夜よあるきか、ヨ、

月つきの寝ね宿やどか、サア、

花はなかけか。ヨ。

アアンンココ小こ憎にくくや、

そそううめめんん絞しぼり、ヨ、

誰たれに解とかした、サア、

洗あらひひ髪かみ。ヨ。

風
虹

片浦風

十七章

千鳥

雨がふるのか、あめ 緑の雨きりが、
 ひゆひゆ、ひゆるひゆ、
 雨あめに千鳥ちどりがちりぢりと。
 ひゆひゆ、ひゆるひゆ、
 明けあけの千鳥ちどりは寂さびしか無ないが、
 え、驚おどろかすなよ、電光いんぱうよ。

短夜

えいやえい、えいやえい、
沖へ消ゆるは幽霊舟か、
白い日の出の雨霧に。
えいやえい。
いつそ死のかと、恨んだ空も、
えい、夜さへ明ければ、此方のもの。
えいやえい、えいやえい。

後朝三曲

沖は晴れかよ

沖は晴かよ、
早や朝風か、
濱は満潮、
法螺のこゑ。

法螺が鳴つたとて、
どうかへさりよか、
こんど、綱解きや、
よその舟。

沖は雪かよ

沖は雪かよ、
ふじ紫か、
濱はしら波、

むら千鳥。

明けの千鳥の
數飛ぶよりも、
はぐれ鴉が
わしや憎い。

沖は遙かよ

沖は遙かよ、

また風虹か。
濱は引潮、
やらず雨。

やらず雨さへ
後追ふものを、
末はしら波、
帆かけ舟。

片浦千鳥

1

何處ぞ、祭か、
月夜の囃子、
濱は松風、
浦千鳥。

わたしや、迷子の
片浦千鳥、
啼けど、遠音の
里囃子。

2

何處ぞ、祭か、
ちらちら燈。
濱は松風。

里囃子。

近いやうでも
あの里囃子、
なまじ、月夜の
遠燈。

遠い岬

1

遠い岬に
燈のつくころは、
なぜか、眼先が
ちらちらと。

2

そこの岬か、
幾濱先か、
とても、ちらちら、
宵燈。

3

遠い岬に

燈のつくころか、
濱にちりちり、
宵花火。

祭もどり

祭もどりに
お月さんにはぐれ、
わたしや、お母ちゃん
戀の闇。

鮒網

1

明日は大漁か、
夕焼ござる、
伊豆の大島
えんやら、茜雲。

えんやらく、えんやらほ、
えんやらく、えんやらほ。
舟なら四挺櫓、八挺櫓、
腕なら男の若盛り、
えんやらく、えんやらほ、
えんやらく、えんやらほ。

2

またも時化かよ、

あの風雲は、
なまじ天城の
えんやら、朝の虹。

えんやらく、えんやらほ、
えんやらく、えんやらほ、
どうでもこいつは命がけ、
板子一枚、底奈落、
えんやらく、えんやらほ。
えんやらく、えんやらほ。

惚れりや、ねこそぎ、

西濱がよひ、

失敗りや、鱒網、

えんやら、東沖。

えんやらく、えんやらほ、

えんやらく、えんやらほ。

網主大事か、こちららか、

どうでも食はれにや同心棒。

えんやらく、えんやらほ、

えんやらく、えんやらほ。

鱒か、鱒か、

あの潮先は、

虹の七色、

えんやら、大漁いろ。

えんやらく、えんやらほ、
えんやらく、えんやらほ。
網主一人が神さまか、
こちとら裸か、網雑魚か。
えんやらく、えんやらほ、
えんやらく、えんやらほ。

5

北は大山、

南は島よ、
東、房州、
えんやら、西、天城。

えんやらく、えんやらほ、
えんやらく、えんやらほ。
大漁だ、大漁だ、また大漁、
舟主、網主、網の雑魚。
えんやらく、えんやらほ、
えんやらく、えんやらほ。

遠漁火

雨夜、星の夜、
いづれとないが、

月の夜頃の
遠漁火。

宵は、ちらちら、
夜中は、ぼつり。

明けりや、ほんのり、
薄漁火。

どうで、外海、遠漁火、
点いても消えても、

此方や、しよんがいな、
ええ、しよんがいな。

風 虹

今朝も、

風空、

また時化ぐもり。

虹が、

見えます、

山の尾に。

早やも

漕ぎやるか

また沖釣か。

どうで、

出やるなら、

蓑に苦。

たまの機嫌と

たまの機嫌と、
朝立つ虹は、
時化やせぬかと、
氣にかかる。

朝立つ虹

定價參拾錢

有所標版

大正十一年十一月十五日印
大正十一年十一月十八日發行

著者 北原白秋

發行者 北原鐵雄
東京市橋區銀座尾張町新地五號

印刷者 山本源太郎
東京市石川區久野町四十五番地

製本金

發行所
東京市橋區銀座尾張町
聯合會
アルス
電話銀座二一八九三番
振替東京二四八八番

トツレフンバ秋白

第六輯	第五輯	第四輯	第三輯	第二輯	第一輯
小唄	民謡體 短唱	詩集	短章	短章	短唱
雀の頭巾	薄陽の旅	動き來るもの	初冬の星	落葉松	月光微韻

◇ 錢拾參册各價定 ◇
◇ 錢貳册各料送 ◇

謠民秋白

第六輯	第五輯	第四輯	第三輯	第二輯	第一輯
朱欒の港	朝立つ虹	城ヶ島の雨	朝草刈り	さすらひの唄	空に眞赤な

◇ 錢拾參册各價定 ◇
◇ 錢貳册各料送 ◇

白 秋 童 謠

第一輯 螢 ごと 苺 小杉未醒氏畫

第二輯 夢 の 小 函 前川千帆氏畫

第三輯 こんこん小山 小杉未醒氏畫

第四輯 お祭のころ 木村莊八氏畫

第五輯 お月夜のうた 森田恒友氏畫

第六輯 ねんねのお鳩 木村莊八氏畫

北原白秋氏著 菊 版 定價各册參拾五錢

二度刷美本 送料各册二錢